

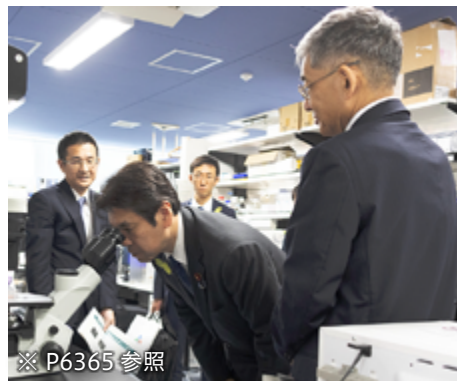
京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

2026.9
No. 790



※ P6367 参照



※ P6365 参照



※ P6373 参照

目次

[大学の動き]

- 理事補が発令される 6365
- 松本洋平 文部科学大臣が高等研究院 物質—細胞統合システム拠点 (iCeMS) と iPS 細胞研究所 (CiRA) を視察 6365
- 2026 年度名誉教授懇談会を開催 6367
- 「京大人文知」の発信に向けた Web サイト「Rethinking the future—未来を再考する人文知」を公開 6367
- 2026 年度ピノキオコンサート～大人とこどものための音・学・会 at 京都大学～を開催 6368
- 第7回現役留学生と卒業留学生が繋がる会「教えて先輩！卒業後の進路、そのリアル」(共催:在京都マレーシア人協会 (MyKyoto)) を開催 6369

[部局の動き]

- 「北川進特別教授ノーベル化学賞受賞特別展示コーナー」開設に伴うオープニングセレモニーを開催 6372
- 「京都大学宇治おうばくプラザ第16回たそがれコンサート」を開催 6373

[寸言]

- 高知で小規模の利点を活かした成功を目指す日々
河合 祐子 6375

[随想]

- 急増する核融合スタートアップ
名誉教授 水内 亨 6376

[訃報]

- 大谷 隆一 名誉教授 6377



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学の
動き

理事補が発令される

補佐する理事	氏 名	任 期	
北川理事	土 井 真 一	令和 8 年 8 月 1 日～令和 8 年 9 月 30 日	(新任)

[目次に戻る ↗](#)

松本洋平 文部科学大臣が高等研究院 物質—細胞統合システム拠点 (iCeMS) と iPS 細胞研究所 (CiRA) を視察

松本洋平 文部科学大臣が、2026 年 7 月 3 日 (金) に本学を訪れ、高等研究院 物質—細胞統合システム拠点 (iCeMS) と iPS 細胞研究所 (CiRA) を視察されました。

視察に先立ち、高等研究院において松本大臣と湊 長博 総長による意見交換の場が設けられました。この中で松本大臣から、同日に公表された国際卓越研究大学の認定などに関する有識者会議 (アドバイザリーボード) による審査の結果に触れつつ、今後の国際卓越研究大学としての本学の活動に対する期待が伝えられました。

その後の iCeMS 視察では、湊総長が改めて挨拶を、続いて北川 進 理事・副学長から歓迎



意見交換の後、撮影に応じる (左から) 松本大臣と湊総長



歓迎の挨拶をする湊総長



古川副拠点長の説明を受ける一行



MOF を活用した高圧ガス容器を手に取る松本大臣

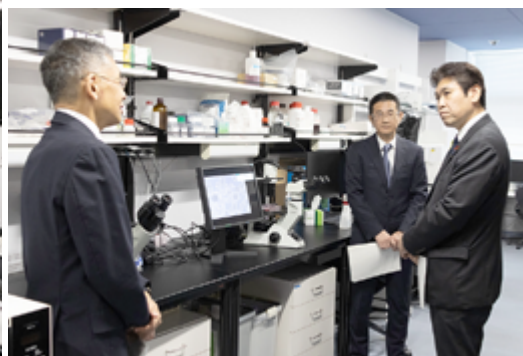


松本大臣と文部科学省、iCeMS 関係者

大学の
動き



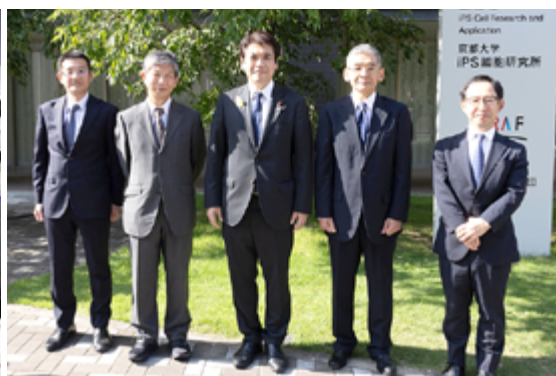
歓迎の挨拶をする江藤所長、CiRA 関係者



江藤所長と高島副所長の説明を受ける松本大臣



iPS 細胞 2.0 を観察する松本大臣



松本大臣と CiRA 関係者（左から、高島副所長、高橋所長補佐、松本大臣、江藤所長、吉田光成 理事）

の挨拶があり、松本大臣を迎えました。次いで、古川修平 iCeMS 副拠点長から拠点の研究概要について、樋口雅一 同特定拠点准教授から、多孔性配位高分子 (MOF) の研究成果に基づいたイノベーションの創出や、スタートアップを通じた社会実装への取り組みについて説明がありました。説明後、松本大臣は拠点内の最新の研究設備や解析機器などの施設を見学されました。

次に、松本大臣はCiRAを視察され、江藤浩之 CiRA 所長、高島康弘 同副所長、高橋 淳 同所長補佐、花谷忠昭 京都大学 iPS 細胞研究財団 (iPS 財団) 業務執行理事らと、CiRA および iPS 財団の概要やパーキンソン病に関する研究など、iPS 細胞研究の現状について意見交換を行いました。また、松本大臣は研究所内を視察され、高島副所長の案内のもと、顕微鏡で「iPS 細胞 2.0[※]」を観察されました。続いて、江藤所長や原田直樹 同共通機器管理室長らが、iPS 細胞などの特性評価・分析に用いる共通機器などの研究設備について説明しました。

視察を終え、松本大臣からは、研究成果の社会実装や若手人材育成の状況を踏まえ、本学のさらなる発展に対する期待が寄せられました。

※ iPS 細胞 2.0：樹立効率が良く、細胞株間のばらつきが少なく、分化効率に優れた高機能な次世代 iPS 細胞のこと。

(総務室)

[目次に戻る ↗](#)

大学
の
動き

2026 年度名誉教授懇談会を開催

2026年7月16日(木)に、百周年時計台記念館にて名誉教授懇談会を開催しました。109名の名誉教授のほか、総長、理事、部局長など合わせて155名が参加しました。

本会は、講話会と懇親会の2部構成で執り行い、はじめに、講話会において、中北英一 名誉教授(防災研究所)による「気候変動が豪雨に及ぼす影響と適応としての治水計画」と題した講演が行われました。

その後の懇親会は、湊 長博 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、井村裕夫 元総長による乾杯の発声により始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告などに話が弾み、盛会のうちに終了しました。



講演する中北名誉教授



挨拶をする湊総長



乾杯の発声をする井村元総長



懇親会の様子

(総務室)

[目次に戻る ↗](#)

「京大人文知」の発信に向けた Web サイト「Rethinking the future -未来を再考する人文知」を公開

成長戦略本部人文知ユニットは、2026年7月、「京大人文知」の社会展開と発信を目的としたWebサイト「Rethinking the future -未来を再考する人文知」を公開しました。

本サイトは、指定国立大学のもとで2022年に「人社未来形発信ユニット」が作成した人社系ハブサイト「Rethinking the future」を新たに人文知ユニットの事業として、学内の総合研究推進本部と協力しながら大幅にリニューアルし、再オープンしたものです。社会課題解決のためのキーワードという枠組みからさらに踏み込み、より根源的な問いへとつながるキーワードを設定する形へとコンセプトを発展させました。

大学の
動き

人文知ユニットは、京都大学の100年を超える歴史と独自の学風に裏付けられた「京大人文知」を社会に共有し、より豊かな連携を目指すことを目的として2025年4月に発足しました。人文学は思考や倫理、文化や歴史など人間の営みの根幹となる部分への問いを深く探究することで、人間に対する理解を深め、批判的思考や倫理的視点を共有することに貢献しています。そうした冷静かつ俯瞰的なものの見方は、複雑な社会課題に対応するために不可欠であり、健全な議論を支える土台ともなります。なお、本サイトは、ユニットのこのような理念に根ざすとともに、本学の国際卓越研究大学構想にある「人文知の社会・国際展開」とも連動しています。

多様化・複雑化がとめどなく進み、情報があふれる現代社会において、山積する課題に対して私たちは近視眼的な解決策 (Solution) を求めるのではなく、根源的な問いに向き合い、思考の枠組みを再考 (Rethinking) する必要があります。本サイトは、そうした社会状況の中で、見えづらくなると同時にわれわれが無意識に目を背けていた問いを、人文学の力を通じて表出させるものです。それによって、企業人、研究者、省庁・行政担当者、一般の方など、さまざまな立場や背景をもつ人々が、未来に向けてともに考えることができる場をつくる試みです。

【概要】

サイト名: Rethinking the future - 未来を再考する人文知

公開: 2026年7月

URL: <https://rethinking-tf.iac.kyoto-u.ac.jp/>



Web サイト「Rethinking the future - 未来を再考する人文知」トップページ

(成長戦略本部、総合研究推進本部)

[目次に戻る ↗](#)

2026年度ピノキオコンサート～大人とこどものための音・学・会 at 京都大学～を開催

学童保育所「京都大学キッズコミュニティ KuSuKu (クスク)」開設3周年を記念して、公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団および公益財団法人文字・活字文化推進機構の協力のもと、「ピノキオコンサート～大人とこどものための音・学・会 at 京都大学～」を2026年7月5日(日)に開催しました。会場の百周年時計台記念館には、小学生とその家族約370名が来場

大学の
動き

しました。

今回のコンサートは、七夕に近い時期の開催であったことから、演奏曲や朗読作品も七夕や星をテーマとした内容となりました。

はじめに、平山朋子 理事補 (DEIB 推進担当) による開会挨拶があり、続いてヴァイオリン奏者の栗原壱成氏、ピアノ奏者の丸山 凜氏によるシマノフスキやドヴォルザークなどの楽曲の演奏が行われました。

その後、アナウンサーで絵本専門士の古賀涼子氏が日本の伝統的な七夕にちなんだ『たなばたものがたり』、『きつねのたなばたさま』を朗読し、物語に合わせて童謡「たなばたさま」の演奏が重ねられました。また、途中の「楽器紹介」トークでは、子どもたちが熱心に聞き入る姿が見られました。

休憩を挟んだ後半は「きらきら星」の演奏に続いて『星の王子さま』の朗読が行われ、音楽と語りが織りなす世界が会場を包みました。プログラムの終盤には、ホルストの「木星」や「星に願いを」など、星にまつわるなじみ深い名曲がダイナミックに演奏され、盛況のうちに閉幕しました。



挨拶する平山理事補



栗原氏、丸山氏による演奏



古賀氏による朗読



演奏と朗読のコラボレーション

(DEIB 推進室)

[目次に戻る ↗](#)

第7回現役留学生と卒業留学生が繋がる会「教えて先輩！卒業後の進路、そのリアル」（共催：在京都マレーシア人協会（MyKyoto））を開催

成長戦略本部では、2025年度より、世代を超えた留学生間のネットワーク構築の支援を目的として、各国・地域留学生団体との共催により、現役留学生（後輩）と卒業留学生（先

大学の
動き

輩)が繋がるイベントシリーズ「教えて先輩! 卒業後の進路、そのリアル」(英語名: Tell Me, Senpai! What's Next After Graduation?)を展開しています。

第7回となる今回は、在京都マレーシア人協会(MyKyoto)との共催で、2026年6月25日(木)に国際科学イノベーション棟内linkhub@で開催しました。当日は、日本で活躍する卒業留学生2名を登壇者に迎え、本学の学部生、大学院生、研究生のほか、他大学生を含む留学生など26名が参加しました。

冒頭の成長戦略本部ソーシャルリレーションズ領域の担当者による趣旨紹介に続き、MyKyotoのTi Jia Qianさん(地球環境学舎・修士課程1回生)より、同会の紹介と登壇者への謝意が述べられました。

第1部のトークセッションには、Anthony FW Foong イメックスジャパン株式会社取締役(薬学研究科・1983年修了)と、Yong Jie Wong 京都先端科学大学准教授(工学研究科・2022年修了)が登壇し、日本で働くことの意義や自身のキャリアパスにおける実体験が語られました。



トークセッションに登壇する Foong 氏



トークセッションに登壇する Wong 氏



トークセッションの様子



ネットワーキングセッションの様子



集合写真

大学の
動き

続くミニパネルディスカッションでは、MyKyotoのNuqman Maherさん（理学研究科・修士課程2回生）の進行のもと、企業人・研究者それぞれの立場から進路選択をめぐる考え方が共有され、参加者からの質問も交えながら、活発なやり取りが行われました。

第2部のネットワーキングセッションでは、参加者が2グループに分かれて先輩を囲み、対話を深めました。最後は会場全体で学びや気づきを共有し、イベントは和やかな雰囲気の中に終了しました。

「先輩との対話を通じて、ひとつの正解を選択しなくても何度でもやり直せることを学んだ」と話す留学生もあり、同イベントは卒業留学生と現役留学生が繋がる場の重要性をあらためて実感する機会となりました。

（成長戦略本部）

[目次に戻る ↗](#)



「北川 進 特別教授ノーベル化学賞受賞特別展示コーナー」 開設に伴うオープニングセレモニーを開催

2026年6月19日(金)、総合博物館(南館1階展示室)にて「北川進特別教授ノーベル化学賞受賞特別展示コーナー」の開設に伴うオープニングセレモニーが開催されました。

同展示コーナーでは、北川 進 特別教授が世界に先駆けて開発した「多孔性金属錯体(MOF)」の研究成果や、貴重な関係資料(サンプル)を広く一般に公開しています。会場には、研究成果の数々に加え、ノーベル賞メダルのレプリカも特別に展示されています。

当日は、北川特別教授および高井正成 総合博物館長が出席し、同展示の狙いや見どころについての説明が行われました。

同展示コーナーは、最先端の科学研究の歩みと、ノーベル賞メダルのレプリカを間近に体感することができる貴重な機会となります。



テープカットをする北川特別教授と高井館長



解説をする北川特別教授



挨拶をする高井館長



記者からの質問に答える北川特別教授



来館者からの質問に答える北川特別教授

(総合博物館)

[目次に戻る ↗](#)



「京都大学宇治おうばくプラザ第16回たそがれコンサート」を開催

2026年6月26日(金)に宇治キャンパスの宇治おうばくプラザにて、「京都大学宇治おうばくプラザ第16回たそがれコンサート」を開催しました。本コンサートは、本学と地域の方々との交流を深めることを目的として、2010年度から継続して行っているものです。

今回は「音楽でひろがるソウゾウリョク」をコンセプトに活動するピアニストの二宮更織氏を中心に、ヴィオラ奏者の西村 希氏、ヴァイオリニストの橋本真友里氏を迎えた構成で行い、当日は市民ら183名が来場しました。

コンサートは、島川祐一 化学研究所長の開会挨拶で始まり、続いて、連携協定を締結している宇治市より、松村淳子 市長の来賓挨拶(貝 康規 同副市长代読)がありました。プログラムは「大学と地域をつなぐ」という趣旨に沿って企画・構成され、演奏者によるトークを交えながら、音楽を入り口としてさまざまな学問へとつながる世界が紹介されました。演奏はピアノソロ、デュオ、トリオと形態を展開させながら進んでいき、来場者は熱心に耳を傾けていました。



開会挨拶をする島川所長



松村市長の来賓挨拶を代読する貝副市长



二宮氏によるピアノ演奏



二宮氏によるトーク



二宮氏、西村氏によるデュオ演奏



二宮氏、橋本氏によるデュオ演奏

部局の
動き



二宮氏、西村氏、橋本氏によるトリオ演奏



閉会挨拶をする渦岡所長

最後に、渦岡良介 防災研究所長による閉会挨拶があり、コンサートは盛況のうちに幕を閉じました。

(宇治地区共通事務部)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

高知で小規模の利点を
活かした成功を目指す日々

河合 祐子



私は、1987年に京都大学法学部を卒業後、約40年間一貫して金融業に携わってきました。新卒で米系銀行に入り為替・金利などのグローバル市場業務に従事した後、ベンチャーシンクタンク設立への参画、中央銀行での調査・実務担当、メガバンクのIT戦略子会社の経営を経て、現在は高知銀行の頭取を務めています。

なぜ今、私が出身地でもない高知を選んでいるのか。ひとつのきっかけとなったのは、7年ほど前に欧州駐在時代に出会った「国民一人当たりのGDPランキング」でした。主要先進国が集まるOECD経済協力開発機構の首位は、人口約65万人のルクセンブルク。規模が正義と思いついていた私にとって、小国でもこれだけ豊かになれるという事実は衝撃でした。関連する学術研究では、「開放経済、顔が見える環境を生かした合意形成、独自価値の追求」が豊かな小国の主な成功要因として挙げられています。日本の都道府県は税制・法制度の裁量が限られるため、成功する小国の戦略を完全に模倣することはできませんが、成功要因を取り込めば何等かの成果は上がるかもしれないという希望はあります。

私が住む高知は、大都市圏から遠い小規模自治体ですが、域外からの人や知見を受け入れる気風と豊かな自然素材という強みがあります。急激な人口減少に直面し、物事を変える原動力となる危機感が十分に醸成されています。デジタル情報プラットフォームや生成AIの発達で、「小さな個」でも見つけてもらえるようになった現代においては、地域や企業が得意分野を磨き上げて情報を丁寧に公開すれば、需要側が探しに来てマッチングが成立し、新たな富を生むかもしれません。こうした展開を実現するためには、自らの強みを特定し、磨き、潜在顧客視点で情報を公開することが不可欠です。

私は、独自価値の探究と理論習得の効用を京都大学で経験しました。東京以外の都市だからこそ見える景色、個性と自由を尊ぶ校風の中で自然と身に着けた発想が私の基礎をつくっています。この拙稿を読んでもいただいた京大OBOGの皆様が、美味しい食や自然を目当てに高知に来て高知を気に入り、高知の交流人口となって下さることを願って、これからも高知の独自価値を見出し、可視化する取り組みを続けて参ります。ぜひ高知にお越しください。高知の名物は何と言っても鰹。これまで召し上がった鰹と同じ魚とは思えない別次元の体験をお約束いたします。

(かわい ゆうこ、株式会社高知銀行取締役頭取、昭和62年法学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

急増する核融合スタートアップ

名誉教授 水内 亨



ホルムズ海峡を巡る不安定な情勢が続く中、私たちの生活が原油関連製品に大きく依存することのリスクが改めて認識されている。さらに、エネルギー安全保障への関心の高まり、世界的な脱化石燃料への要請、情報化社会の進展に伴う巨大データセンターの電力需要の増加などエネルギー需給を取り巻く環境は大きく変化している。こうした状況の下、さまざまな次世代クリーンエネルギーの研究開発が進んでいる。なかでも核融合エネルギー（近年は「フュージョンエネルギー」とも呼ばれる）は、長年その領域の研究に関わってきた筆者にとって無関心ではいられない。核融合は、発電だけでなく、水素製造、工業用熱供給、宇宙推進器等にも応用可能であり、その関連技術は、高エネルギー中性子線の発生、極限環境下での材料研究、医療用アイソトープの生成など、多様な活用も期待される。

核融合実用化への挑戦は、世界中の研究者・技術者の70余年の研究を経て、国際熱核融合実験炉(ITER)や原型炉計画等の大型国家プロジェクトが展開されるに至っている。ちなみに、我が国で初めて公の場で核融合研究が議論されたのは、1956年4月に京都大学基礎物理学研究所に天文、物理、電気工学の研究者が集まった研究会とされる。京都大学では、1958年3月、学部・研究所の枠を越えた核融合共同研究グループが結成され、同年11月には「ヘリコン計画」と称する、理論・実験両面にわたる共同研究も始まった。これらの活動はそれぞれ継承・発展し、本学は現在も国内外の核融合共同研究拠点の一つである。

近年、核融合関連分野への民間投資が急速に拡大している。核融合スタートアップ企業が参加するFusion Industry Associationの調査によれば、約15年前には世界で10社程度だった核融合関連の民間企業は、現在では50社を超える。各国政府主導の研究開発によって核融合プラズマに関する理解が深化し、膨大な実験データの蓄積に加え、研究を加速する複数のブレークスルーも達成された。また、デジタル技術を活用した革新的装置設計・製造技法も台頭している。こうした進展がスピノフを生みやすい環境を形成し、さらに、地球環境問題対策の緊急性と技術革新への投資意欲の高まりと相まって、民間参入を後押ししていると思われる。

各核融合スタートアップ企業は、それぞれが技術的多様性に富んだ独自のアプローチを採用している。いずれも一見魅力的であり、かなりスピード感のある実用化までのロードマップが提示されており、核融合開発は民間主導の競争時代へ移行しつつあるようにも見える。どの方式が商業的成功に至るかは不明ではあるが、企業間の競争が実用化を加速することを期待したい。一方、過度に拙速な競争は、核融合開発全体に負の影響を及ぼす可能性もある。大学や公的研究所が、基礎研究に裏打ちされた学術的評価とフィードバックを提供し、その役割を適切に果たすことが求められる。民間のスピードと公的研究機関の慎重な検証が両立してこそ、核融合の着実な実用化につながるであろう。

(みずうち とおる、平成30年退職、元エネルギー理工学研究所教授、専門は核融合学)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、大谷隆一 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績などを紹介します。

大谷 隆一 名誉教授

大谷隆一先生は、令和8年6月14日逝去されました。享年87。

先生は、昭和37年京都大学工学部機械工学科を卒業、同39年同大学院工学研究科機械工学専攻修士課程を修了、同42年同博士課程を単位取得退学し、同44年京都大学工学博士の学位を授与されました。昭和42年4月京都大学工学部助教授に採用され、同57年教授に就任、工学部物理工学科材料強度学講座を担当されました。平成14年定年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与されました。この間、昭和63年から学生部委員会第三小委員会委員長、平成元年4月より大学入試センター工学部実施委員会委員長、同9年6月から同12年3月まで京都大学入学選抜方法研究委員会委員、同11年4月から同14年3月まで京都大学技術顧問、同11年4月から同13年3月まで京都大学広報委員会委員を務められたほか、京都大学自己点検評価実行委員会委員、京都大学学術出版会理事を務められました。また同13年4月から工学部新工学教育プログラム実施検討委員会委員長を務めるなど、大学の管理運営に貢献され、教育・研究機能拡充に尽力されました。



先生は耐熱材料の高温強度、なかでも変形や破壊の力学に関する研究において優れた研究業績を残され、その学術分野の発展に寄与されるとともに、エネルギー関連構造物における素材・部材評価や機器信頼性評価の分野において多大な貢献をされました。これらの研究成果は202編の学術論文にまとめられ、日本機械学会賞論文賞をはじめ数多くの賞を受けられるなど国内外で高く評価されています。また、主な著書に『材料の高温強度論』、『環境・高温強度学』などがあります。

さらに、日本材料学会関西支部長および副会長、日本機械学会理事および副会長、文部科学省および日本学術振興会の専門委員ならびに大学基準協会判定委員会委員長などを務められ学術の発展に尽力されました。また、通商産業省原子力発電技術顧問会非常勤顧問、発電設備検査協会設備診断実証試験分科会主査、大阪科学技術センター超高温金属材料分科会主査および新エネルギー・産業技術総合開発機構超高温材料開発部会部会長などを務められ工業の発展にも尽力されました。

以上のとおり、大谷先生は、長年にわたり機械工学・材料力学、特にクリープや疲労における金属材料の寿命評価などの分野において、斯学の進歩に大きく貢献されました。また、新領域として高温における小規模破壊の力学を切り開かれ、常に指導的役割を果たしてこられました。それらの功績は実に大きく顕著なものがあります。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)